

# 日本人学生のサポート認知に対する ソーシャル・ネットワークメンバーの要因分析 —留学生との比較—

田 中 共 子

(広島大学留学生センター・助手)

神 山 貴 弥

(広島大学学校教育学部附属

教育実践研究指導センター・講師)

高 井 次 郎

(名古屋市立大学人文社会学部・助教授)

藤 原 武 弘

(関西学院大学社会学部・教授)

## 要約

異文化環境下においてソーシャル・サポートが得られると、適応が促進されるという、ソーシャル・サポート・ネットワークの適応促進仮説の観点から一連の研究を行ってきた。先には、在日留学生のソーシャル・サポート・ネットワークの構造分析を行った。このたび対照データを得るため、日本人学生を対象としたソーシャル・サポート・ネットワークと適応に関する調査を行った。本稿では、そのネットワークメンバーについての数量化I類を用いた要因分析の結果を中心に、サポート認知に関する検討を行い報告する。

## 【目的】

環境移行に続くソーシャル・サポート・ネットワークの形成は、環境への適応を促進すると考えられる。我々はこの観点から在日留学生の適応研究を続けてきたが、このたび比較データを求めて日本人学生を対象とした調査を実施した。

これまでは、留学生の適応 (Tanaka, Takai, Kohtama & Fujihara, 1994a)、ソーシャル・サポート・ネットワークの構造 (Tanaka, Takai, Kohtama, Minami & Fujihara, 1994b) ソーシャル・サポート・ネットワーク形成の適応への影響 (Tanaka, Takai, Kohyama, Minami & Fujihara, 1997) どを明らかにしてきた。しかし留学生の適応の問題といっても、それがはたしてどの程度重大な問題かは、絶対的なデータだけでは評価しづらいという指摘もある。つまり日本人学生より適応問題が小さいのなら、むしろ良好な適応をしている集団といえるであろうし、また相当に大きいのなら、対策の必要性も説得力を持って論じることができるだろう。

留学生のソーシャル・サポート・ネットワークを論じるについても、他の集団による参照データが必要と指摘される。異文化環境下でのその形成困難や発達の不十分さは、いわば前提として論じられる場合が多い。異文化滞在の一般論としては成り立つ論旨であっても、この集団の場合はどうであるかを確認するためにはそれなりのデータが必要になる。

例えば、環境移行後にネットワーク形成がほぼゼロから開始されることは、ホスト国内の移動でも基本的には似ている。留学生の場合はそれが特に困難で、ネットワークが発達していないといえるのだろうか。あるいは、むしろより良好な発達を遂げて、適応に有利に作用しているといったことはないだろうか。もしかしたらホストの学生と比べて大きなネットワークができていても、適応に有利な資源はすでに持っているがその活性化が問題だ、といったような段階にいる場合も考えられる。

仮に、留学生が異文化環境下で作っていたネットワークが相対的に小さく不十分なもの、そしてそれが適応を妨げる一因になっているということが証明できたとしたら、介入計画の必要性は高まるだろう。心理的援助の効果的な方法として、ネットワーク形成のインパクトを十分に事前アセスメントできていれば、介入はその重要な方策としてより評価されるだろう。

つまり何らかの意味で対照性を持ったデータを提供することで、留学生という集団の特徴がより明確になり、その問題の特質をより明らかにすることができる。そして適応援助への介入方略の示唆が得られると考えられる。このたび筆者らは、日本人学生のソーシャル・サポート・ネットワークと適応について測定した。一つの参照データを提供する集団と考えて、先の調査の留学生と同じ大学に学ぶ学生を調査対象とした。今回はその中から、ソーシャル・サポートに関する項目を取り上げて分析した結果を報告する。

先に、留学生の持っているソーシャル・サポート・ネットワークの構造について検討した際は、数量化Ⅰ類を用いてサポート供給源の機能分化を明らかにした (Tanaka, et al., 1994b)。またソーシャル・サポート認知と本人のデモグラフィック要因との関連についても調べた。そしてサポート認知が本人のどのような要因と関わっているか、またいかなるサポート源からいかなるサポートが得られるかという、機能の分化の状況について、明らかにした。

本稿ではその対照データとして、日本人学生のサポート認知をとりあげて、デモグラフィック要因による検討と数量化Ⅰ類による要因分析を行う。この検討によって、日本人学生が持っているソーシャル・サポート・ネットワークの特徴の一つとして、サポート認知を規定する要因について、明らかにすることができる。

## 【方法】

### 1. 調査対象者

さる国立大学の日本人学生133名。属性内訳は、以下の通り。男性41.4%、女性58.6%。

年齢は、平均19.6才、SD0.78。理科系32.3%、文科系67.7%。学年は2年生73.7%、3年生23.3%、4年生2.3%、その他0.8%。居住形態は、一人83.3%、家族と13.6%、その他3.0%。

2. 調査方法：集合法。授業中に質問紙調査を実施（回収率100%）。

3. 調査内容：デモグラフィック要因、ネットワーク関連の質問項目は、Tanaka, et al. (1994a)、Tanaka, et al. (1994b)による。今回の日本人学生用には、留学生用質問紙の日本語版をもとにして、以下3点を修正した。「国籍」について、日本・同国・その他の国だったのを、日本と他国だけにした。「関係」では、ホストファミリーとチューター学生を省いた。「日本語および日本文化」のサポートは、外国語および外国文化とした。

ソーシャル・サポート・ネットワークとしては、「日本で大切な関わりのある人」を10人まで想起し、カテゴリ項目として性別、年齢（20才未満、20～29才、30～39才、40才以上）、国籍（日本人、他国人）、関係（指導教官、他の教職員、研究室の学生、他の学生、家族、親戚、他の友人・知人）、接触頻度（毎日、～週1回、～月1回、～3カ月に1回、それ以下）、評定項目として外国語、外国文化、勉強・研究、相談・励まし、楽しむ・出かける（レジャー）、物・金、生活の情報の7種のサポート期待の認知（①期待できない、②どちらともいえない、③期待できる）、関係の満足度（①かなり不満足、②やや不満足、③やや満足、④かなり満足）、より頼る方（①自分、②同じ、③その人）を答えた。

以上のうち今回は満足感以外のネットワーク項目をとりあげるが、満足感に関しては田中・神山・高井・藤原（1996）を参照。

## 【結果】

### 1. 日本人学生のソーシャル・サポート認知に関する分析

7種類のサポートそれぞれの平均値を求めると、表1のようになる。主に相談、楽しむ、情報、勉強のサポートが多い。なお、留学生との比較も表1に付した。留学生のほうが、語学、文化、勉強の学習関連のサポートが多いが、相談、楽しむ、物・金のサポートは日本人学生の方が多い。

サポートの平均に関して、本人のデモグラフィック要因として、年齢（20才以下、20才以上）、学籍（2年生、3年生）、性別、居住形態（一人、家族）によるt検定を行った。性別では、語学（ $t(128)=-2.47, P<.05$ ）、文化（ $t(128)=-2.37, P<.05$ ）、勉強（ $t(130)=-2.80, P<.01$ ）のサポートは女性の方が多かった。年齢、学籍、居住形態による有意差は認められなかった。

サポートの平均点について因子分析を行うと、I：学業（語学、文化、勉強、物）、II：生活（相談、楽しむ、情報）の2因子に分かれた（表2）。

表1 日本人学生と留学生のサポート項目の評定における差 (t検定)

不等号は数値の大小、網掛けは「数値が大」の方を示す。\*\* $P < .01$ , \* $P < .05$ , + $P < .10$   
日本人学生と留学生とで表記が異なる項目については、日本人学生用/留学生用として示した。

項目	日本人学生			留学生		t	df	p
	M	SD		M	SD			
サ 日本語/外国語	1.49	0.49	<	2.46	0.47	-16.47	261	**
ポ 日本/外国文化	1.44	0.48	<	2.43	0.45	-17.31	261	**
ル 勉強・研究	2.01	0.52	<	2.24	0.57	-3.33	263	**
ト 相談・励まし	2.71	0.37	>	2.50	0.45	4.04	254.1	**
・ 楽しむ	2.71	0.35	>	2.46	0.47	4.94	246	**
平均 物・金	1.97	0.53	>	1.74	0.62	3.27	260	**
均 情報	2.50	0.46		2.39	0.57	ns		

表2 日本人学生におけるサポートの種類に関する因子分析

サポート	I	II
外国語	.87	-.08
外国文化	.89	-.10
勉強・研究	.67	.14
相談・研究	-.03	.73
楽しむ・出かける	-.06	.75
物・金	.56	.35
情報	.26	.70
固有値	2.37	1.75

## 2. 日本人学生のソーシャル・サポート認知におよぼす要因分析

ネットワークにあげられたのは、合計855人である。これらの人々に関して頻度の偏りをなるべく避けてカテゴリーをまとめ、数量化I類によって分析した(図1~7)。先の留学生データの分析にならい、以下に7種類のサポートそれぞれについての解析結果を報告する。なおネットワーク・サイズの平均6.52人(SD2.76)中、他国人数は0.03人(SD0.21)と少なく、解析に無理があるため、国籍は説明変数からはずした。

勉強のサポートは、関係、エクイティ、年齢の順に規定力が大きく、主に教職員から得ている。外国語では関係、年齢、接触頻度の順、外国文化では関係、エクイティ、年齢の順で、いずれも教職員から多く、家族から少ない。物質的なサポートは年齢、次いで関係によっており、主に年長者や家族から得る。楽しみのサポートはまず年齢により、同世代である10代、20代の若年者から多く得ている。相談のサポートは接触頻度の関与が大きく、よく会う人からより得ている。

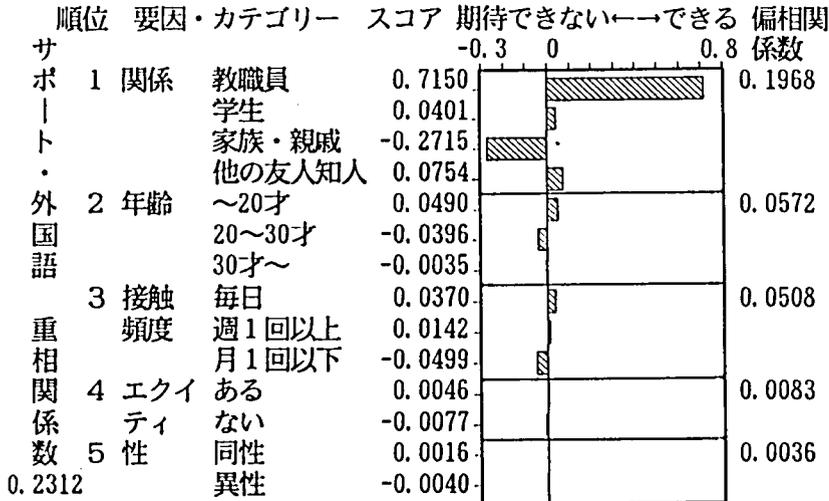


図1 サポート (外国語) に関連する要因

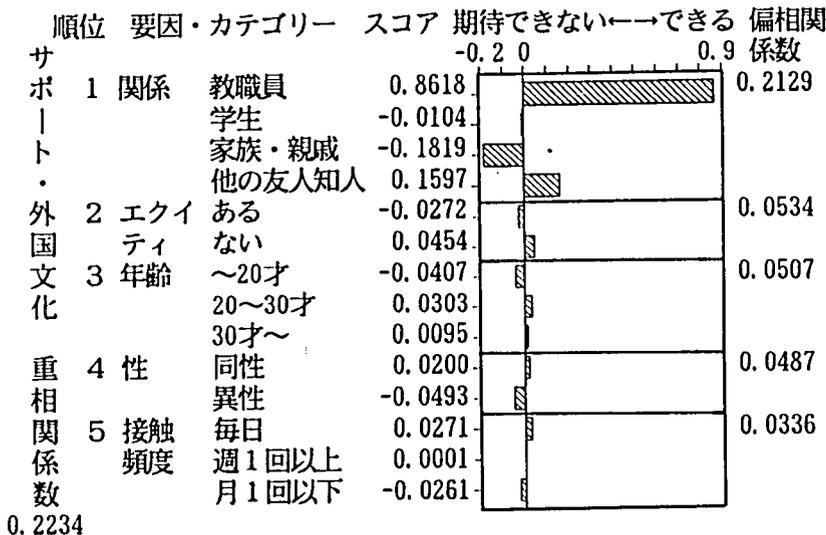


図2 サポート (外国文化) に関連する要因

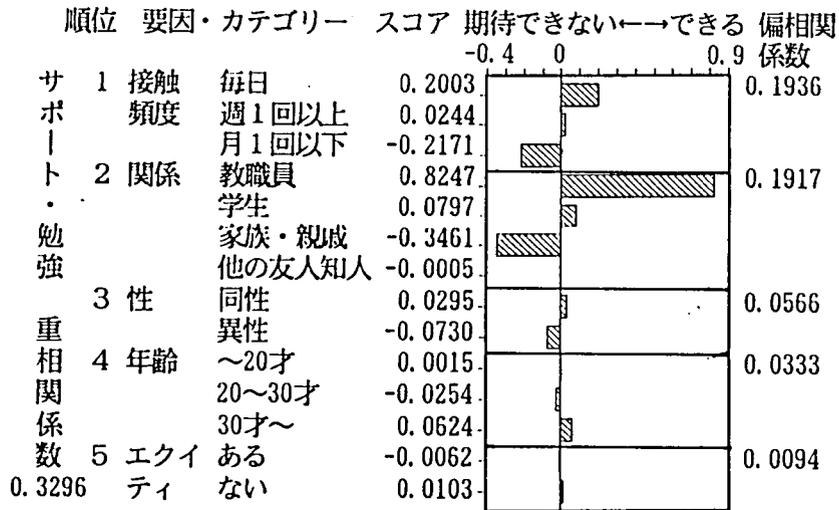


図3 サポート（勉強）に関する要因

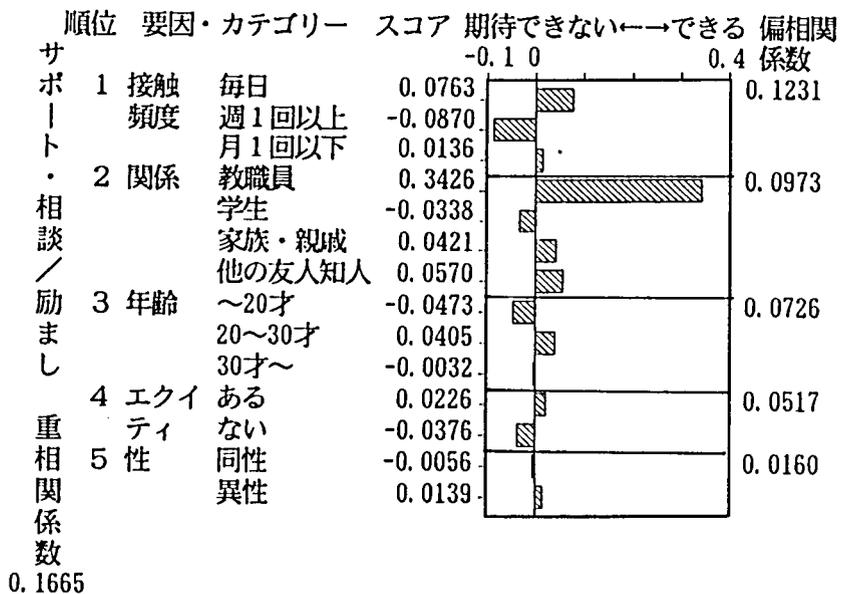


図4 サポート（相談／励まし）に関する要因

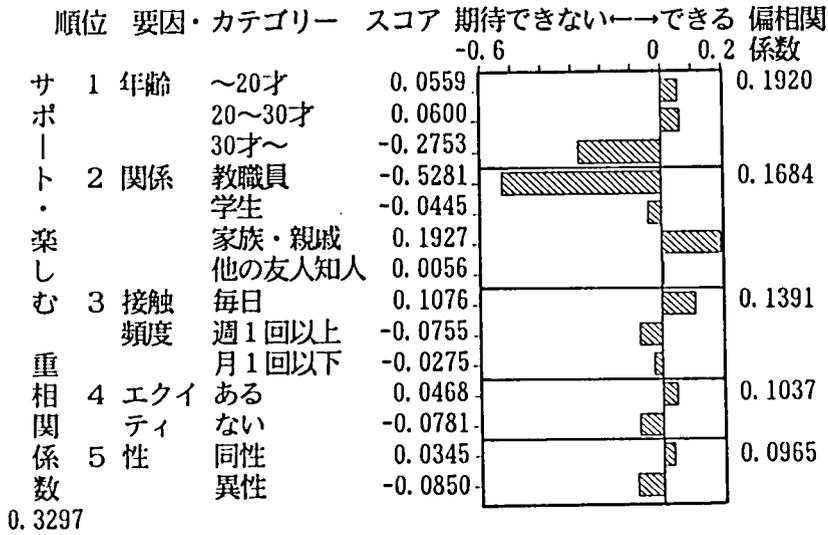


図5 サポート (楽しむ) に関連する要因

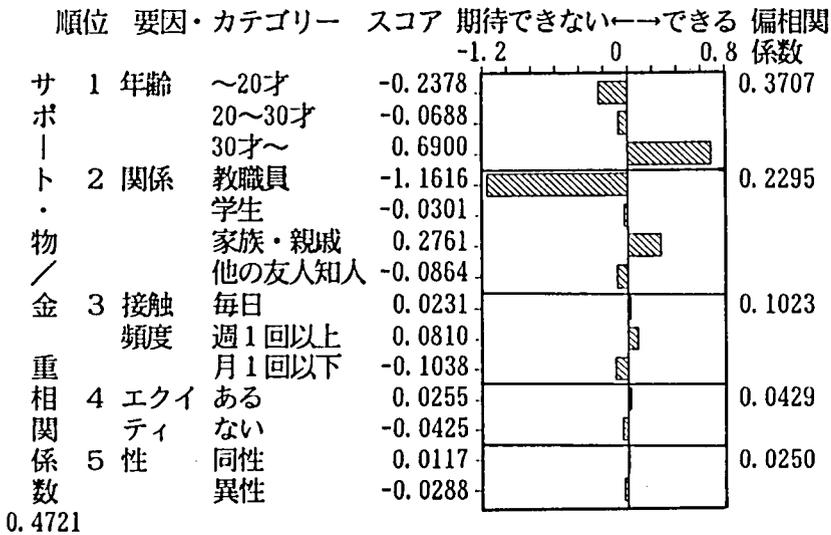


図6 サポート (物/金) に関連する要因

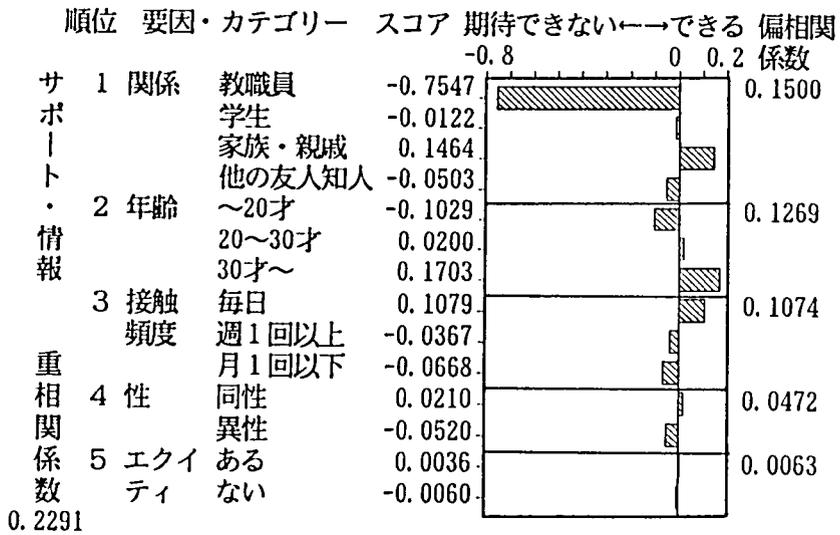


図7 サポート（情報）に関連する要因

#### 【考察】

楽しみなどでの身近な同質者のサポート提供は、調査対象者の交友関係を反映していようし、物質などでの年長者のサポートは、彼らが庇護され援助される立場にあることを示していよう。

外国語や外国文化に関しては、サポートそのものが少ない。留学生などとの交流があれば、そこがこれらのサポートの提供源になるのだろうが、今回の日本人学生のネットワークには外国人の存在自体が希薄である。

もっとも、日本人学生が学生チューターをして異文化接触体験を持った場合は、ネットワーク内の外国人は6.58人 (SD3.53) 中の0.52人 (SD0.86) と増加する (田中,1996)。留学生の場合は、ネットワーク内の日本人が6.28人 (SD3.62) 中3.47人 (SD2.79) であることと比べ (Tanaka, et al.,1994b から再分析)、日本人学生のネットワークに異文化性が少ない。異文化滞在者とホストとの、この違いは顕著といえよう。

留学生における同様の要因分析の結果 (Tanaka, et al., 1994b) と比較すると、サポート提供者に機能分化が認められるという基本的知見は、共通している。しかし、提供者像は異なっている。今回の日本人学生のデータからは、留学生と比較して、サポート提供者のネットワークが、より単純で身近な関係から成っているようすが伺われる。例えば同性や同年代の者の存在感が、より大きいことが指摘できる。日本人学生のネットワークに関する同質性の指摘は、Minami & Yamaguchi(1989) の、アメリカ人大学生と日本人大学生との比較調査でもみられる。この意味では、日本の若者の特徴という側面があるのかも

しれない。

個々のサポートに関して、以下比較していってみよう。語学のサポートは、留学生はよく会う日本人から得やすく、日本人学生は主に教職員から得やすい。ホストの言語については、専門の教員でなくともホストであればサポート提供者となり得るのだろう。しかし外国語となると、外国人と交友の少ない日本人学生は、サポート源が専門の教員に限られてしまうものと思われる。

異文化面のサポートにしても同様の傾向がある。日本人学生は、専門家たる教員からサポートを得やすい。留学生では国籍の規定力が大きく、日本人からサポートを得やすく、ホストファミリーや親戚などの、家族代わりに近しくしている人の存在感が大きい。ただし言語よりは文化の方が日常的な危険性が低いのか、接触頻度の規定力は言語より低い。

勉強・研究に関しては、日本人学生は、教職員でしかもよく会う人からサポートを得ている。留学生は、教職員や研究室の人やチューター学生から得がちであり、少し関係の範囲は広いが、やはりよく会う人に助けられる傾向にある。今回の日本人学生は学部生が主体なので、教え手は教師に限られがちなのであろう。今回の留学生には、研究室生活を送る院生や研究生も多く含まれるので、研究生活を助けてくれる人として、教員以外に先輩やチューターなどの人々も自ずとあがってくるのであろう。

相談・励ましに関しては、日本人学生はよく会う教職員、留学生はよく会う同国人からサポートを得やすい。留学生が同国人ネットワークを大事にして活用し、頼りにもしているようすがうかがわれる。異文化圏では、同文化出身者とは困難を共有でき、同じ視点から具体的にも精神的にも助けられる。同国人の役割は大きく、特別な存在感を持っていると考えられる。また文化的なアイデンティティを保持する役割もある (Furuhama & Alibhai, 1985)。母文化の保持と異文化への同一化とのバランスにも、必要になるのであろう。信頼できる相手に同国人が多いのかもしれないが、相談・励ましを要する事態には、異文化性に関わるような事が多いという意味もあるかもしれない。日本人学生は、励ましを指導者や親などに期待しており、指導される側の存在という感がある。

レジャー関係の楽しむサポートに関しては、日本人は若い人や家族に期待しがちである。留学生は、友人・知人、ホストファミリーや親戚などの、学外でしかもよく会う人からサポートが得られると認知している。留学生は、学内では勉強中心の関係を築いており、必要とあらば学外に楽しみのためのネットワークを広げているものと推測できる。日本人学生は、若い人同士で楽しんでいるか、あるいは大学生にはなっても家族との楽しみという形をまだ十分保持しているものと思われる。

物質的には、日本人学生は大人や家族からサポートを得ており、つまりは親であろう。留学生のサポート源は、ホストファミリーや親戚・家族、他の友人・知人といった学外者を中心としており、しかもよく会う人で、若い人も年長者も含まれる。個人的に家族代わ

りになるような親しい人を学外に作り、そこから物質的な援助を得ていると思われる。そして日本人学生は、親に守られ金銭的に援助されている存在といえる。

情報面のサポートは、日本人学生では家族や親戚、年長者、そしてよく会う人からが多い。留学生は、ホストファミリーや親戚や他の友人・知人で、よく会う人からが多い。つまり有用な情報を持っていそうな人とのつながりが、学外に発達しているのである。日本人学生は、目上でいろいろ知っているような人から、役立つ情報をもらおうと思われる。この意味でも、上の人に頼り守られる存在といえるかもしれない。なお日本人学生は、情報や物やレジャーでは教職員にあまり期待していない。教職員は、勉強や指導面でのサポート源と認知されていて、この意味では役割の限定が明確といえよう。

サポート認知には性差がみられたが、女性の方がサポートを受けやすいという一般的な知見と矛盾しない。また大学の2年および3年次では、すでに学生生活ひいてはネットワークが安定しているのか、年齢や学年差は認められず、この意味では比較的均質な集団といえた。留学生の場合は滞日年数によって変化もみられるが (Tanaka, Takai, Kohyama, Minami & Fujihara, 1997)、環境移行後の年数の影響という点では、同文化内より異文化環境下の方が、影響が大きいのかかもしれない。日本人学生の場合は、環境移行のインパクトは比較的すみやかに吸収されるが、相対的にインパクトの大きい留学生の場合は、より長い年月をかけながら、新環境への移行と適応が完成されていくのかかもしれない。この点を確認するには、入学後の年数レンジがより大きいホスト学生集団と比較して見る必要がある。

因子分析では、留学生であれば因子Ⅰ・学習サポート（日本語・日本文化、勉強）と因子Ⅱ・生活サポート（相談・励まし、物・金、情報）に分かれていた (Tanaka, et al., 1994b)。日本人学生では、物・金のサポートが、因子ⅡからⅠに移る点が異なる。日本人学生にとっては、因子Ⅰは勉強以外も含んだ実用色の濃いサポートなのかもしれない。

今回は、学部生を主体とした日本人学生を調査対象者とした。日本の大学生という意味では標準的な集団であろうが、大学院生などであればまたライフスタイルや成熟度が違うだろう。他の集団データとも比較していくと、興味深いことだろう。今回の結果は、今の日本人学部生の対人関係のありようを反映しているようにも思われる。留学生調査の対照データは、留学生の属性や生活条件が日本人学生とかなり異なるので、完全なコントロールが難しいといわれる。つまり「留学生」という集団は、例えば学籍でみても研究生が多いし、年齢も高く家族持ちも多いことなどから、日本人学生とは異なる面が多く、ホストの完全な対照データを設定しにくい。そのうえ背景も多様で、出身国ひとつとっても様々である。生活パターンを決する奨学金の種類や額などもいろいろである。何を比較するのか、何による特徴を測定したのかもつかみにくい。要因が多様すぎて、統計的な調整はしばしば困難になる。

このように背景が多様で雑多ともいえる集団から得られた結果を解釈していくには、少なくともその特質を規定すると思われる主要な要因を拾いだして、その構成を明確にしておくことが必要になろう。そして現存するいく種類かの集団から複数のデータを得て、参照していくしかないだろう。それら比較のための集団それぞれの特徴を考慮しながら、留学生と対比していき、両集団のありようを解釈していくことになろう。

今後は、日本人学生と留学生間でさらにネットワークの構造を比較することと、適応の状況や因子構造を比較すること、および日本人学生の場合にもネットワーク形成と適応との肯定的関係が見られるかどうかを確認することなどが課題として残されている。

#### <引用文献>

Furnham, S. & Alibhai, N. 1985 The friendship network of foreign students: A relocation and extension of the functional model. *International Journal of psychology*, 20, 709-722.

Minami, H. & Yamagushi, S. 1989 A cross-cultural study on social support structure of college freshmen in the U.S.A. and Japan. In J. P. Forgas & J. M. Innes (Eds.) *Recent advances in social psychology: An international perspective*. North-Holland: Elsevier science publishers, B.V.

田中共子 1996 日本人チューター学生による異文化接触体験(2): その役割と異文化交流に関する質問紙調査 広島大学留学生センター紀要、7 (印刷中)

Tanaka, T., Takai, J., Kohtama, T., and Fujihara, T. 1994a Adjustment patterns of international students in Japan. *International Journal of Intercultural Relations*, 18(1), 55-75.

Tanaka, T., Takai, J., Kohyama, T., Minami, H., and Fujihara, T. 1994b Social networks of international students in Japan: Perceived social support and relationship satisfaction. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 34(1), 1-11.

田中共子・神山貴弥・高井次郎・藤原武弘 1996 日本人学生のソーシャル・サポート・ネットワークと適応: 留学生との比較 日本グループダイナミクス学会第44回大会発表論文集、236-237

Tanaka, T., Takai, J., Kohyama, T., Minami, H., and Fujihara, T. 1996 Effects of support networks on cross-cultural adjustment. *Japanese Psychological Research*, 39(1), 12-24.